



Data

監督・脚本・主演: エリア・スレイマン

出演: エリア・スレイマン/タリク・コプティ/アリ・スリマン/ガエル・ガルシア・ベルナル

👁️👁️ みどころ

「故郷はナザレ、僕はイスラエル系パレスチナ人」と公言する“現代のチャップリン”ことスレイマン監督が、主役として素顔のままスクリーン上に登場！

新作映画を売り込むため、パリ、ニューヨークなどを旅する彼が目にする風景は、中国映画『春江水暖』（19年）で観たような山水画ではなく、まさに現代の寓話そのもの。しかし、これって現実？それとも幻想？

人生は近くで見ると悲劇だが、遠くから見れば喜劇である。あなたはチラシに躍るそんな名文句を、本作からどう実感？



■□■スレイマン監督とは？なぜ彼は現代のチャップリン？■□■

私は本作で、エリア・スレイマン監督の名前と顔をはじめて知った。チラシによると、“現代のチャップリン”と称賛されている彼は、これまでわずか長編3作品という寡作ながらも、イスラエル国籍のパレスチナ人であるという複雑なアイデンティティと唯一無二の作風により、世界中で熱狂的な支持を得ているらしい。

また、本作は2019年の第72回カンヌ国際映画祭で、パルムドール賞を逃したものの、特別賞と国際映画批評家連盟賞をダブル受賞するほどの高評価を受けたそうだ。こりや必見！

それにしても、本作はフランス、カタール、ドイツ、カナダ、トルコ、パレスチナ合作だが、これって一体なぜ？また、本作は邦題が『天国にちがいない』なら、原題も『It Must Be Heaven』だから、全く同じ。一体何が「天国にちがいない」というのだろうか？

■□■ナザレはどこに？イスラエル系パレスチナ人とは？■□■

私は『十戒』（56年）や、『キング・オブ・キングス』（61年）をはじめてとする「キリ

ストもの」や、『ベン・ハー』(59年)、『スパルタカス』(60年)、『クレオパトラ』(63年)等の「エピックもの」が大好き。近時は、その手の大量のVTRも購入して、自宅で観ている。そのため、スレイマン監督自身が主役として(?)登場している本作で、「僕の故郷はナザレ」と語っているのを見ると、瞬時にナザレのイエス・キリストを思い出すうえ、ローマ帝国に抑圧されていたユダヤ民族の歴史を思い起こしてしまう。

「モーゼ」の時代に故郷を追われたユダヤ人は、その後長い間、世界中の国々に散らばった後、第二次世界大戦後の1948年に、アメリカの支援によって、やっと自分たちの国・イスラエルを建国することができたが、そもそもパレスチナとは一体ナニ?そして、イスラエル系パレスチナ人とは一体ナニ?

■□■イスラエル系パレスチナ人はどんな目で世界を見るの?■□■

トランプに勝利したアメリカのバイデン政権は、中東情勢をいかに処理するの?また、アフガン戦争、イラク戦争の後始末をいかにつけるの?それが、重要な外交テーマの1つだが、かつて第1次~第4次と続いた“中東戦争”の時代は、イスラエルvsアラブ(パレスチナ)の対立抗争がより明確だった。イスラエルは小さい国だが、アメリカの支援を受け、軍事力や武器、兵力共に強力。しかして、本作の公式サイトは、中東・パレスチナについて、次のとおり解説している。すなわち、

ももとは現在のイスラエルとパレスチナ自治区、一部地域を除くヨルダン、そしてレバノンとシリアの一部を指していたが、1948年ユダヤ人によるイスラエル建国宣言によって、先住のアラブ人は「国外」に逃げて難民となるか、その地に留まるかの選択を迫られた。後者を選んだものは、自動的に「イスラエル人」にさせられてしまった。この「パレスチナ系イスラエル人」であり、イエスの故郷ナザレに生まれたのが本作の監督エリア・スレイマンである。

なるほど、なるほど。

去る1月20日に観た中国映画『春江水暖』(19年)は、富陽で暮らすある大家族の物語を山水画のように描いた傑作だったが、山水画はあくまで物の例えとして表現したもの。それに対して、世界を旅するスレイマン監督が次々に目の当たりにするさまざまな風景と人々の営みは、現実。そう思うのだが、これは本当にスレイマン監督の目に映っているもの?それとも、彼の幻想?

トランプを支持するデモ隊の一部がアメリカの議会で乱入する姿は幻想ではなく現実だったが、本作に見るセントラルパークに裸の天使が登場する姿は現実?また、パリの美しい街の中を戦車が我が物顔に通る姿も現実?カフェテラスに一人座ってコーヒーを飲むスレイマン監督の目の前を、着飾った美女たちが次々と通り過ぎていく風景は幻想ではなく現実であってほしいし、それを見るとたしかに「天国にちがいない」と思ってしまうが、さて・・・?

■□■彼の新作企画は？彼は何を見ているの？■□■

新型コロナウイルス問題や森喜朗東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長の女性蔑視発言。さらには国会のセンセイ方の銀座の高級クラブでの飲食問題等について、連日同じような情報を垂れ流しているだけの民放テレビ。そして、自分は今まで一度も悪いことをしたことがないかのように、“右にならえ方式”の辛口コメントを連日のように並べたてるコメンテーターたち。こんな“何でもあり”で自由平等、弱い者に何でも寄り添う理想的な今の日本国は、かつてマルクスやエンゲルスが唱えた理想的な共産主義国家。私はそう思っているが、スレイマン監督が「天国にちがいない」と見る世界は、本作のどこにどのように描かれているの？

スクリーン上にいつも同じスタイルで登場するスレイマン監督は、サイレント時代のチャールズ・チャップリンのように、一言もしゃべらない。また、チャップリンのように体全体でその感情を見せることもないから、わずかに動く表情によって、彼の気持ちの動きを理解しなければならない。しかして、ナザレを故郷に持つスレイマン監督は、今なぜ新しい映画の企画をもって世界中を旅しているの？ちなみに、彼の友人であるガエル・ガルシア・ベルナルの紹介を得て映画プロデューサーに持ち込んだ新作の企画は、「パレスチナ色が弱い」という理由で却下されてしまったが、それをどう受け止めればいいのか？また、ニューヨークで開催された「アラブ・フォーラム」に招かれた彼は、そこでどんな発言をするの？それらについてスクリーン上ですべてを見せず、その結末を観客の判断にゆだねているところが、本作のユニークさだが・・・。

■□■現代のチャップリンは、本作のどこにどんな希望を？■□■

『ローマの休日』（53年）や、『スパルタカス』（60年）の台本を偽名で書いて大成させた脚本家のダルトン・トランボは、『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』（15年）（『シネマ38』123頁）ですっかり有名になったが、1950年代にハリウッドで起きた“赤狩り”の中で、彼は「ハリウッド・テン」の1人にされてしまったから、大変だった。それと同じように、喜劇王として一世を風靡していたチャールズ・チャップリンも、“赤狩り”旋風の中、1952年に国内を追放されてしまったから大変だった。

それに対して、スレイマン監督はあくまでイスラエル系パレスチナ人の立場を堅持しながら本作を作っている。そのため、本作のチラシには「人生は近くで見ると悲劇だが、遠くから見れば喜劇である」の見出しが躍り、続いて「現代のチャップリンからパレスチナへのもう1つのラブレター」と書かれている。チャップリンの喜劇王としての実績は、今でもリバイバル上映される大量の作品群を見れば明らかが、スレイマン監督のイスラエル系パレスチナ人というアイデンティティを理解し、それに共感するためには、本作をじっくり観察することが必要だ。

チラシには続いて「アイデンティティ、国籍、そして“故郷”とは一？」、「軽やかな映像美で疑問を投げかけ希望をもたらす、極上の叙情詩」と書かれているが、さて、あな

たはスレイマン監督の本作のどこに、どんな希望を見出すことができるだろうか？

2021（令和3）年2月10日記